九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学蔵『源氏小鏡』の歌

川原田，祐子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/10351

出版情報：文獻探究. 37, pp.1-14, 1999-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

九州大学蔵『源氏小鏡』の歌

川原田　祐子

一　九州大学蔵『源氏小鏡』

本稿は、九州大学文学部国語学国文学研究室蔵の写本『源氏小鏡』についての報告である。

そもそも改めて言うまでもなく、『源氏小鏡』は、南北朝期に成立したと見られ、その内容は、巻名由来歌を中心に採録され、主にそれに関わる梗概、そしてその巻の源氏付合を有するものであり、代表的な『源氏物語』梗概書の一つと目される。

この書には多くの伝本が残り、その諸本系統は、歌の異文・歌数・本文・跋文などの違いから、大きく三系統に分けられる。

すなわち、歌数一一〇首前後を有し、本文を『源氏物語』別本本文に依ったと思われる系統、つまり「百十首本」たる「古本系」と、青表紙本本文によって古本系本文が改訂され、歌も一三〇前後に増補され、跋文も添えられた系統、つまり「百三十首本」たる「改訂本系」、そして「異本系」の三系統である[注1]。伊井氏によれば、改訂本の出現の時期は定かでないが、文明年間からさほど遡らない頃という[注2]。

また、『源氏小鏡』は、古活字版・整版本としても今日に多く伝わり、同じく伊井氏によれば、古活字版は古本系本文を伝え、整版本は改訂本系本文の流れを汲むとされる。しかしながら、『源氏小鏡』の古活字版の歌は、寺本直彦氏に簡単な指摘があるように[注3]、古本系統本の善本と考えられる[注4]持明院基春筆本などとは一致しない異文を持つものがあるため、古本系の中でも区別して考える必要があると思われる。

本稿で扱う九州大学文学部蔵『源氏小鏡』（以下、便宜上、該書を九大本と仮称する）は、歌数一一一首を有し、歌・梗概に青表紙本による改訂増補が見られず、跋文を持たない。従って、これらの点から、九大本はおおよそは百十首本・古本系に属する一本と見なしてよいと思われる。

しかし、歌の異文や梗概本文を詳細に検討すると、例えば、古本系の持明院基春筆本とは異なる箇所を多く含み、改訂本や異本とのとの関わりを示唆する部分も持ち、古本系の一本というに収

まらない特徴が見られる。

本稿では、そうした九大本について、特にその歌において問題となる事例について考察する。

九大本は、早蕨巻に「君にとてあまたのとしをつみしかはつねを忘ぬはつわらひなり」歌を有す。この歌は、従来異本系にのみ見えるとされる歌であり、それが古本系の性格を備えた九大本に含まれる点は注目される[注5]。

そこで以下この点について考えてみる。

二　「君にとて」歌について

九大本の中で、本来古本系にない歌が入っている例として挙げられる早蕨巻の「君にとて」歌は、宇治山の阿闍梨が、父八宮と姉大君を亡くした中の君に、新春の蕨に添えて贈った歌である。

君にとてあまたのとしをつみしかはつねを忘ぬはつわらひなり

この歌は、異本系にのみ見える。しかし、たとえば、異本系とされる片桐洋一氏蔵本『源氏こかゞみ』[注6]の該当歌とは若干の異同がある。

君にとてあまたの春をつみしかはつねを忘れぬはつわらひかな

（『異本源氏こかゞみ』二八四頁二行）

この片桐本の「あまたの春」は、二つの流れがあるといわれる[注7]版本『源氏物語』本文―三条西家系統本文に近い流れと嵯峨本意端を発し『湖月抄』へ連なる江戸流布本となる流れ―の両方にも見える。ここでは、前者に属するものとして『萬水一露』、後者に属するものとして『絵入源氏物語』の該当歌を挙げる。

また、通行本文もこれに一致する。

君にとてあまたの春はつみしかは常を忘ぬはつ蕨なり

（『萬水一露』）

君にとてあまたの春をつみしかばつねをわすれぬはつわらびなり（あざり）

（『絵入源氏物語』）

但し、『源氏物語大成』を見ると、以下のような異文が見える。

きみにとてあまたの春をつみしかはつねをわすれぬはつわらひなり

春―とし（別）陽明本　※なり―かな（別）平瀬家本

（『源氏物語大成』一六七七⑭（底・定家本））

『大成』の異文によると、九大本が拠ったのが、青表紙本でなく、また片桐本のような異本系『源氏小鏡』でもなく、陽明本系

『源氏物語』本文もしくは陽明家本本文を持つ異本系『源氏小鏡』であったと考えられる。

さて、この「君にとて」歌は、既述の通り、阿闍梨が中の君に贈った歌である。次に、『源氏物語』本文におけるこの場面を見てみる。

あさりのもとよりとしあらたまりてはなに事かおはしますらむ御いのりはたゆみなくつかうまつり侍りひとゝころの御ことをなむやすからすねむしきこえさするなときこえてわらひつく〳〵しおかしきこにいれてこれはわらはへのくやうして侍るはつをなりとてたてまつれりてはいとあしうてうたはわさとかましくひきはなちてそかきたる

きみにとてあまたの春をつみしかはつねをわすれぬはつわらひなり

御前によみ申さしめたまへとありたいしと思まはしてよみいたしつらむとおほせはうたの心はへもいとあはれにてなをさりにさしもおほさぬなめりとみゆることのはめてたくこのましけにかきつくしたまへる人の御ふみよりはこよなくめとまりてなみたもこほるれは返事かゝせ給

このはるはたれにかみせむなき人のかたみにつめるみねのさわらひ

つかひにろくとらせさせ給

（大成一六七七⑨）

この場面に相当する部分を、九大本と片桐氏本で比較すると、次の通りになる。『源氏小鏡』では、早蕨巻巻名歌としてこの贈答歌を挙げて説明する。

〈九大本〉

ひしりの坊より中の君のあね君にをくれたゝひとりなかめおはしましゝ所へ春のはしめにわらひをつくくしにそへておかしけなるかこに入てたてまつるとて

君にとてあまたのとしをつみしかはつねを忘ぬはつわらひなり

この春は誰にかみせんなき人の形見につめるみねのさわらひ

とよみて奉りしゆへそかし。

（※句点は引用者による。）

〈片桐本〉

ひしりの坊より中の君のあね君にもおくれたゝひとりなかめおはします所へ春のはしめにさわらひつく〳〵しなとをりていもゐの御さかなとゝておかしけなるこに入て奉りたまふ

ひしりの哥に

君にとてあまたの春をつみしかはつねを忘れぬはつわらひかな

とよみ給ひて奉る。中の君の返事に

此春をたれにかみせんなき人の形見につめる嶺のさわらひ

とよみかはしたまふ哥故なり

九大本と片桐本では、阿闍梨と中の君の贈答歌に至るまでの梗概に若干異同が見られるが、それはこの際問題ではない。注目すべきは、贈答歌の贈り主である。

片桐本は、源氏物語本文と一致し、巻名由来歌は中の君の「此春を」（※大成本文では「このはるは」）歌とする。この点に関し、贈答歌の片方、つまり中の君の歌しか載らない古本・改訂本の叙述は以下の通りである。

〈古本〉

ひしりのはうより中のきみのあねきみにをくれてたゝひとりなかめおはしましゝところへ春のはしめにわらひつく〳〵しおかしけなるこにいれたてまつるとて

此春はたれにかみせんなき人のかたみにつめるみねのさわらひ

とよみてたてまつりしゆへそかし。

〈改訂本〉

ひしりのはうより中の君姉君にをくれてたゝ独なかめおはしめしゝ所へはるのはしめにわらひつく〳〵しおかしけなるかこに入てたてまつるとて

この春はたれにかみせんなき人のかたみにつめるみねのさわらひ

とよめり。

この二つによれば、巻名由来歌「この春は」の詠者は、阿闍梨となる。これが、源氏物語本文と齟齬することは見た通りだが、『源氏小鏡』以外の注釈書・梗概書類を見ても、こうした古本系・改訂本系小鏡の記述に一致する説は、当然のことながら見当たらない。たとえば、『花鳥余情』『河海抄』では、この歌の本歌を挙げるに止まり、詠者には言及しないが、『細流抄』[注8]などでは、「この春は」歌は中の君詠とし、それは、他の源氏梗概書『源氏大鏡』[注9]『源氏物語提要』[注10]『光源氏一部歌』[注11]でも同じであり、物語と一致する。

・『細流抄』

君にとて

故八宮の御時の嘉例をわすれさると也

…（中略）…

この春は

この歌、巻の名たり。八宮大君などもましまさねば、我身かた身とみるばかりなり。

・『源氏物語提要』

…故宮をとりをき参らせひしり阿闍梨の方よりも、みねのさわらひ、沢の根芹を摘て参らせ給ふとて御文有。上かきに、おまへによみ申さしめ給へと有、披露状の躰也。

君にとてあまたの春をつみしかはおりをわすれぬはつわらひ哉

つみしとは、摘を積にもたせたり。折は嘉例なり。中君なみたをなかして、御返し、

此春は誰にか見せんなき人のかたみにつめる峯のさわらひ

此歌ゆへにさわらひの巻といふ也。たれにか見せんとは、大君うせ給ふ事也。なき人とは、父宮の事也。いつも給はる蕨なれは、去年迄は姉君も見給ひしに、此春は我はかり見る悲しさよとの心也。

薫はあけまきの御事わするゝ間なくおはしけれとも…

これら注釈書・梗概書類の記述から判断すると、古本系・改訂本系小鏡の記述は、『源氏小鏡』固有の誤りと考えられる。

古本系では、この記述は基春筆本に止まらず、他の古本系の伝本にも共通して見られ注12改訂本もその記事に関してはそのまま継承する。つまり、『源氏小鏡』において、古本系から改訂本系への流れの中で、「この春は」歌詠者は一貫して、阿闍梨と誤られる。それに対して、九大本や異本系の片桐本は、その誤りに気づいたと思われる。しかし、物語本文通りの片桐本はともかく、九大本は阿闍梨詠の「君にとて」を補入したのはよいが、同時に「この春は」歌を削り忘れたために、二首ともが阿闍梨が詠んだ歌のような形で残ってしまったと考えられる。

では、九大本は、この「君にとて」歌を直接『源氏物語』別本本文に拠ったのか、別本系本文を持つ異本系小鏡から取ったのか、何れなのだろうか。可能性としては後者であろう。というのは、九大本には、他の巻にも『源氏物語』本文と内容が異なる記述が見えるため、少なくとも、『源氏物語』本文を見ていたとは考えにくいからである。

以下に、そうした九大本が物語本文と内容的に異なる箇所を具体的に見てみよう。

三　「中将君」について

それは幻巻の中将君についてである注13。

まつりの日ひるねしたる所へおはしましたり。おきあかりたるにかたはらなるあふひを御覧して此かさしの名さへわすれけれとの給て源氏（中将イ）

さもこそはよるへの波にみくさゐめけふのかさしの名さへわするゝ

との給ひけれはおほやけ事にいひなしてつれなかりける。螢とひ日くらしのなくをきゝ給ひてもあはれにおほす。夕殿に蛍とふと…

これを見ると、「さもこそは」歌を詠んだのは源氏となっていて、それに対し、中将君が「おほやけ事にいひなしてつれな」く対応したと取れる。しかし、物語本文では中将君の詠歌となっている注14。因みに、中将君は、故紫上付き女房で、源氏の召人とされる人物である。

まつりの日いとつれ〳〵にて…中将の君のひんかしおもてにうたゝねしたるをあゆみをはしてみ給へはいとき〻やかに

おかしきさましておきあかりたり。…とかくひきかけなとするにあふひをかたはらにをきたりけるをよりてとり給ていかにとかやこのなこそわすれにけれとの給へは

さもこそはよるへの水にみくさゐめけふのかさしよ名さへわするゝ

とはちらひてきこゆ。けにといとおしくて

大かたはおもひすてゝし世なれともあふひは猶やつみおかすへき

なとひとりはかりをはおほしはなたぬけしきなり。

（幻一四一五①）

この場面に関して、古本・改訂本は、九大本と異なり、物語本文と一致する。

〈古本〉

…このかさしよなさへわすれけりとの給ひてけれは中将

さもこそはよるへの浪にみくさゐめけふのかさしになさへ忘るな

なと申たりしもやさしかりし事なり。

古本と改訂本では梗概は同じだが歌に異文があり注15、古活字版は梗概部分の「わすれけり」が「わすれさりける」という異文になっているが、詠者については、三者とも中将君であって問題はない。

他方異本は、詠者に関しては九大本と一致するが、後続の文章が異なる。

まつりの日ひるねしたる所におはしたり。おきあかりたるにかたはらなるあふひを御覧して此かさしに名さへわすれけりとの給ひて御歌に

さもこそはよるへの浪にみくさいめけふのかさしと名さへ忘るな

とよみ給ひしなり。ひくらしの聲をきゝ給ふにもかことかましき聲かなと恨給ひほたるの飛かふを御覧してせきてんに蛍とふと珍しからぬ古事さへ…

（『異本源氏こかゞみ』二三四頁八行）

以上のように、小鏡の諸系統本文を比較すると、「おほやけ事にいひなしてつれなかりける」という梗概は、物語本文はもちろん、いずれの系統の小鏡にもない。では、九大本のこの叙述は一体どこから生じたのだろうか。鍵は場面の類似性に求められそうである。つまり、幻巻のこの場面と他の巻の場面との混淆の可能性である。

そう考えると、確かに、『源氏物語』にはもう一つ、源氏と「中将の君」と呼ばれる女房とが歌を交わす場面があったことが思い出される。

それは夕顔巻にある。

らうのかたへおはするに中将の君御ともにまいる。…うちとけたらぬもてなしかみのさかりはめさましくもとみたま

ふ。

咲花にうつるてふなはつゝめともおらてすきうきけさの
あさかほ

いかゝすへきとてゝをとらへたまへれはいとなれてとく
あさきりのはれまもまたぬけしきにて花に心をとめぬと
そみる

とおほやけことにそきこえなす。

（夕顔一一〇②）

この女房の対応が賞賛に値するものであったことは、『無名草子』注16に明らかである。

いみじきこと。六条わたりの御忍びありきの暁、出でたまふ見送りきこえに、中将の君参るを、隅の間の高欄のもとにしばしひき据ゑたまひて…「いかがはすべき」とて、手をとらへたまへるに、

朝霧の晴れ間も待たぬ気色にて花に心をとめぬとぞ見るおほやけごとに聞えなしたるほど、いみじくおぼゆ。

（二四〇頁）注17

このような中将の君への評価は、中古のみならず、中世に至っても変わらなかったとみえ、『源氏小鏡』以外の中世の他の注釈書類を見てもそれは立証される。

たとえば、「梗概化に当って、物語中に生起する事件の順序を必ずしも忠実に追う事なく、便宜に従って時に綿密、ある時はこれを省略する」といわれる『源氏大鏡』注18にも中将の君の記事は残り、また『源氏物語提要』は、「わか身の事はいわすして、主君御息所の事をよめり。…此女房も貞節也」と、儒教臭はあるものの、一応評価する。

これらの資料の記述から、九大本が成立した頃は、「中将の君」には、「おほやけごとに聞こえなした」〃機転の利く女房〃というイメージが定着した時代だったと思われる。おそらく、そのような土壌があったからこそ、夕顔巻と幻巻の「中将の君」とが錯覚混同され、九大本に見られるような記述が生まれたと考えられるのである。

中世から近世に入り，版本となった『源氏小鏡』の本文はは改訂本系であるといわれる注19。しかし、九大本は、異本系にしかない「君にとて」歌を持ち、そこに別の中将君を投影させており、つまりそれは九大本が改訂本小鏡隆盛の埒外で成立したことを推測させるように思える。

このような、九大本が改訂本系本文の拡がりの時流とは異なる位置にあったことを窺わせる事柄としては他にもたとえば、九大本収録歌の本文に、古活字版『源氏小鏡』の歌や他の『源氏物語』梗概書との関わりが見出せる点が挙げられる注20。

この両者との関係のうち、前者の古活字版『源氏小鏡』の本文は古本系であるとされる注21ため、厳密には古本系の範疇に入れるべきかもしれないが、先に述べたように、古活字版は歌において、必ずしも完全に古本系に合致するものばかりとはいいがたいため、古本系小鏡とは区別して考える必要があると思われる。

この、古活字版との関わりが認められる点は、九大本の歌の特

徴的な事例と思われる。また、九大本の歌には、古活字版のみならず、代表的源氏梗概書として『源氏小鏡』と併称される『源氏大鏡』と関わりを示唆する例も見つかるので、次にそうした事例をみることにする。

四　古活字版・『源氏大鏡』との関わり

先に述べた通り九大本の歌には、古活字版とのみ一致する異文があり、その中にはさらに源氏梗概書の歌異文と一致するものもある。また、九大本歌の書入れに目を転じると、それが源氏梗概書とのみ一致する例もあった[注22]。

そこでまず、九大本における古活字版と共通する歌の例をあげる。

◇帚木

・あふ事の夜をしへたてぬ中ならはひるまも何かまはゆかるへき

「まはゆかるへき」

（古）（改）（異）まはゆからまし

◎（古活）まはゆかるへき

※『大成』帚木六一③

あふことの夜をしへたてぬ中ならはひるまもなにかまはゆからまし（異文なし）

◇御法

・をくとみし程そはかなきともすれはかせにみたるゝ萩の下露

「みし程そ」（古）（改）みる程そ

（異）みる程も

「萩の下露」（古）をきの下露

（改）（異）萩のうは露

◎（古活）をくと見し程そはかなきともすれは風にみたるゝ萩のしたつゆ

※『大成』御法一三八九⑦（大島本）

をくとみる程そはかなきともすれは風にみたるゝ萩の上露

「萩」（別）阿里莫本　荻

傍線を施した歌の異文に共通する本文を持つのは、古活字版『源氏小鏡』であることが見て取れよう。

他の梗概書類と共通する歌の例において、九大本と関わりを持つかと考えられたのは、『源氏大鏡』である。それは、以下の二例である。

◇帚木

・さゝかにのふるまひしるきゆふ暮にひるまますくせといふそわりなき

「いふそわりなき」

（古）（改）（異）「提」いふがあやなき
（古活）さゝかにのふるまひしるき夕暮にひるますくせとい
ふかわりなき
「大」（三〇頁）
さゝがにのふるまひしけき夕ぐれにひるますぐせ
といふがわりなき（あやなき三）注23

『大成』帚木六一①
さゝかにのふるまひしるきゆふくれにひるますくせとい
ふかあやなさ
「あやなさ」（別）陽明家本　あえなさ
国冬本　あやなき

この帚木「さゝかにの」歌は、確かに古活字版とも一致するが、九大本書入れ部分「しるき」に関して見ると、九大本に異文の形で示される「しけき」は『源氏大鏡』にも「し（るニ）け き」とあることが確認される。

◇浮舟
・たちはなの小嶋は色もかはらしをこのうき舟そ行（はるへ一本）ゑしられぬ
「小嶋は色も」　（古）小嶋か色も
（改）「大」小島の色は
（異）小嶋の色も
「提」小島（ママ）かさきは注24
（古活）小嶋はいろも
「行ゑ」
（古）（改）（異）（古活）「提」行ゑ
◎「大」よるべ（ゆくへ三）
『大成』浮舟一八九二⑧（池田本）
たちはなのこしまのいろはかはらしをこのうきふね
そゆくゑしられぬ
「こしまのいろは」
（別）陽明家本　こしまかいろは
麦生本　こしまは色も

また、この浮舟「たちはなの」歌についても、九大本「行（よるへ一本）ゑ」の書入れ部分「よるへ一本」は、『源氏大鏡』に一致する注25。

今まで見てきた例から考えると、九大本は、歌に関しては、古本系の中でも特異な形態を持つ古活字版や『源氏大鏡』など他の梗概書類との関わりを示唆するものを持ち、すなわちそれは九大本成立の手掛かりを知る上での様々な可能性を投げかけているように思われるのである。

五　九大本の成立過程

さて九大本の成立に関してであるが、まず、九大本は親本でないことが予想される。

一つには形態上の問題が挙げられる。九大本の「君にとて」歌は、偶然にも丁の始めに位置する。しかしそれは、余白部分に後から無理に書き入れたというものでなく、九大本が書かれた当初から自然にそこに記載されたものであるように思われる。

そこで、池田亀鑑『古典の批判的處置に關する研究』注26を参考に考えると、九大本の成立過程は以下のように想定される。

一、古本系小鏡を詠んだ読者が、阿闍梨の「君にとて」歌が「この春は」歌に置き換わっている誤りに気づき、「君にとて」歌を「この春は」歌の前に細字か朱で挿入した。

二、次にこの本を書写した人がこの二首を併記し、本文に混入させた。

三、二の本を写したものが九大本となった。

（九大本の成立が三ではなく、二の段階に繰り上がる可能性もあると思うが、本文に混入させてしまったのが九大本であるという積極的な証拠はないので、右のような段階で成立したと考えておく。）

また、仮に親本であるとするならば、「君にとて」歌を書き入れた段階で、詠者の訂正ができたはずである。しかし、そうした痕跡はなく、不審も示されないままで、後続の文章は記される。

これらの点から、九大本そのものは、単に原本を書写した本であるといえる。

また、この「君にとて」歌の考察により、九大本の原本の改訂過程がある程度推測される。

九大本原本には、（九大本を見る限り）歌の面から古本系の中に改訂本と異本の要素が混在するが、どちらの影響が先かは、その点からだけでは判断できなかった。が、「君にとて」歌について、古本から改訂本へはそのまま継承された部分が、異本によって加筆訂正を受けたと考えられた。そうすると、つまり、九大本原本は、古本系本文を持ち、それが、改訂本↓異本の順で、二度にわたる訂正が施された本であるとすることができよう。異本の改訂の後に改訂本による校合が行われたとすると、この歌は、古本にも改訂本にもない歌なので、削除されたはずである。従って、この点からも、改訂は改訂本↓異本の順に行われたと考えるべきであろう。

ところで、「君にとて」歌について、『源氏物語』陽明本系本文によって挿入したのか、『源氏小鏡』の異本系だったのかについては判然としない。しかし、陽明本は『源氏物語』の諸本中でも特異な本文なので、これを参考にして改訂した可能性は大変低いといってよい。また、この歌が異本系のみにある歌である点から、『源氏物語』本文そのものによったというよりも、こうした異文を載せた異本系『源氏小鏡』との接触によると考える方が妥当であろう。

ただ、この九大本の存在から、『源氏小鏡』享受は、単にそれを読むに止まらず、個人流ながらも、種々の伝本による改訂にまで及ぶレベルに達していたということがいえると思う。もちろん、そうした熱心な享受者の存在は、『源氏小鏡』の残存伝本の量からも容易に予想されるところではあるが、九大本は、そうした様々なバリエーションを生むに至った享受状況を直接的に今日に示すサンプルの一つとなっているということがいえよう。

六　まとめ

これまでみてきた九大本『源氏小鏡』の考察からは、九大本が含み持つ、いくつかの可能性が指摘できる。

九大本の歌は、その大半が古本系であったが、『源氏小鏡』の従来言われてきた三系統のいずれにも合致しない異文（傍注異文含む）について、古本系の中でも古活字版や『源氏大鏡』との関わりが考えられた。これは、九大本が両者と何らかの交渉を持った一つの証左となろう。つまり、一つには、古本系『源氏小鏡』と古活字版『源氏小鏡』との直接の関わりを示す資料であるとでき、また一つには、『源氏大鏡』と『源氏小鏡』の何らかの関わりを示す例とみなせよう。尤も、この二者が直接的に関わり合ったというものではなく、両者が同じ源泉に接したことを示唆すると考える方が妥当であろうが。

後者のような事例を示す書には、寺本直彦氏によって紹介された青山学院大学図書館蔵『源氏小鏡抄』があるｊｅ27。同書は、「天文二十三年八月」の奥書を持ち、戦国大名の『源氏物語』享受を窺い知ることのできる興味深い資料だが、特に、その採録歌八〇首に『源氏大鏡』（一類本）とのみ共通する歌一九首を含む点が注目される。寺本氏によると、「『源氏小鏡』と『源氏大鏡』との接触混成による特異な享受形態を示すもの」だとされる。

『源氏大鏡』と一九首もの多数の共通歌はないものの、九大本にも『源氏大鏡』の歌異文と共通すると思われるものが見える点から、右の書に従う例の一つになりうるのではないかと思われる。

ここで、九大本の梗概について一言だけ触れると、改訂本と異本によると思われる改訂が行われるにとどまり、他の梗概書等とのとの校合にまでは及んでいない。

しかしながら、源氏学者ではないにも関わらず『源氏小鏡』の改訂を思い立ち、実行完成させた点をみると、この九大本原本の編集に携わった人間はそれなりに熱心な読者であったとは思われる。おそらく、このような読者層に支えられて、中世以来『源氏小鏡』は受け継がれたのであろう。

また一方、九大本のような『源氏小鏡』の存在から、『源氏小鏡』受容の在り方も浮かび上がるように思われる。すなわち、九大本原本は、歌も梗概も何度も改訂された後の『源氏小鏡』だと思われるが、そうしたことは、九大本原本に限ったことではないと思われる。むしろ、そのような自由な改訂による『源氏小鏡』受容がなされ、その中で生み出された一本が九大本原本なのではあるまいか。

中世以降の『源氏物語』梗概書の受容状況を探るためには、『源氏小鏡』に限らず、他の梗概書の中世と近世での変容また改訂状況の調査が不可欠であろう。それらが明確になることで、『源氏物語』享受史がよりいっそう肉付けされることは疑いないところである。九大本『源氏小鏡』は、そうした意味で、梗概書ひいては『源氏物語』の具体的受容相の一端を覗かせるという点で、資料的価値を持った一本であるとすることができよう。

最後に、九大本の書誌を記す。

大本。一巻一冊。列帖装。縦二五・九糎×横一八・五糎。表紙は網目文様四ツ紋入りの縹色緞子張。表紙・裏表紙の見返しに金泥

秋草模様有り。題簽無し[注28]。内題「源氏目録」[注29]。本文料紙は鳥の子紙。墨付一一七丁。首に遊紙一丁。一面十行で、和歌はほぼ一字下げ。図書番号［国文７７１Ｆ５］。第一丁表上部に「九州大学図書印」（朱・陽）、同丁右下に「帋魚庵蔵書」の蔵書印有り（朱・陽）。奥書・識語なし。保存状況は良好で、ミセケチ等も殆どなく、麗筆で記される。近世初期写か[注30]。

注

注1　「百十首本」「百三十首本」は稲賀敬二氏、「古本系」「改訂本系」は伊井春樹氏による。稲賀敬二『源氏物語の研究成立と伝流』（笠間書院　昭和四二年）第三章「中世源氏物語梗概書　各論」・第二節「源氏小鏡の類本と成立」二二一頁。伊井春樹『源氏物語注釈史の研究』（おうふう　昭和五五年）第二部「中世源氏学の周辺領域」第一章「『源氏小鏡』の成立とその影響」第一節「『源氏小鏡』の成立」八〇三頁。

注2　伊井氏前掲書八五四頁

注3　寺本直彦『源氏物語受容史論考』（風間書房　昭和四五年）後編「源氏物語受容史の諸問題」第七節「源氏小鏡作者説の吟味（上）」第四項「源氏小鏡の本文と耕雲本源氏物語の本文との比較」八五四～八五八頁

注4　伊井氏前掲書八八〇頁

注5　今西祐一郎先生の御教示による。九州大学「大学広報」八一三号参照。（平成六年四月発行）

注6　本文が増補傾向の異本系『源氏小鏡』とされる。

注7　清水婦久子「版本『萬水一露』の本文と無刊記本『源氏物語』」帝塚山短期大学日本文学会「青須我波良」第五三号「鈴木昭一先生古稀記念特集」（平成九年一二月）
ちなみに、『萬水一露』は「貞徳が弟子に何度も書写させ、出版させた」もので、「貞徳の指導によって春正が編集したという『絵入源氏』に匹敵する版本テキスト」といわれる。（清水婦久子「『首書源氏物語』の本文―同時代の版本との係わり―」片桐洋一編『王朝の文学とその系譜』研究叢書一〇三　和泉書院　平成三年）
また、『萬水一露』と絵入『源氏物語』は以下のテキストによる。
『源氏物語古注集成』第二七巻　伊井春樹編『萬水一露』第四巻（おうふう　平成三年）
九州大学文学部蔵絵入版本『源氏物語』（刊記「承應三甲午稔八月吉日　洛陽寺町通八尾勘兵衛開板」）

注8　『源氏物語古注集成』第七巻　伊井春樹編『内閣文庫本細流抄』（おうふう　昭和五五年）

注9　『古典文庫』第五〇八冊収　石田穣二・茅場康雄編『源氏大鏡』

注10　『源氏物語古注集成』第二巻　稲賀敬二編『今川範政源氏物語提要』（おうふう　昭和五三年）

注11　『源氏物語古注集成』第三巻　今井源衛編『光源氏一部歌』（おうふう　昭和五四年）

注12　『源氏小鏡　高井家本』（教育出版センター　昭和五三年）・広

島大学蔵『木芙蓉』（『源氏物語　木芙蓉（完）』広島平安文学会平安文学資料稿第二期別巻1　昭和五六年六月）の二本を参照した。

注13　九大本には、この他にも物語本文と異なる箇所が散見する。それはたとえば、御法巻梗概の次のようなものである。

さてとりまかなひ奉りて七日〳〵の御仏事ものこりすくなく秋ふかく風はたさむくふきしほれたる夕暮に大将殿より御使あり。

（古本「おほゐとの」改訂本「父のおとゝ」異本「大将殿」）

物語本文で、紫上の法要を営む源氏に弔問の使いを送り最初に歌を詠み交わすのは致仕大臣つまり昔の頭中将であるはずが、九大本と異本では「大将殿」と誤られる。この誤りは、御法巻で源氏に付き添っていた夕霧の呼称が「大将の君」なのでそれとの混同か、あるいは、夕霧の御法巻の詠歌「いにしへの秋の夕の恋しきにいまはとみえしあけくれの夢」と致仕大臣の詠歌「いにしへの秋さへいまの心ちしてぬれにし袖につゆそをきそふ」の二首の初句がおなじ「いにしへの」であったために生じた誤解かと考えられる。

注14　しかし、引用本文の通り、九大本の筆者または校合者もその点を不審に思ったと見え、傍注に「中将イ」と書き添えている。

注15　改訂本本文は以下の通り。

さもこそはよるべの水にみくさゐめけふのかさしよ
名さへわするる

注16　稲賀敬二・久保木哲夫校注訳『完訳日本の古典二七・堤中納言物語　無名草子』（小学館　昭和六二年）

注17　この箇所の前にも、次のような評価がある。

また「いみじき女は、朧月夜の尚侍、源氏流されたまふもこの人ゆゑとおもへばいみじきなり。（略）また六条御息所の中将こそ、宮仕人の中にいみじけれ

（参照　注16　二二二〜二二三頁）

注18　稲賀氏前掲書二〇二頁

注19　伊井氏前掲書八五五頁

注20　猶、今回九大本と比較したのは、小鏡の古本系・改訂本系・異本系・古活字版、『源氏大鏡』『源氏物語提要』である。

また校合に用いた『源氏小鏡』テキストは以下の通り。

古本系・京都大学図書館蔵伝持明院基春筆本
改訂本系・九州大学文学部蔵慶安四年版本
異本系・片桐洋一氏架蔵本「源氏こかゞみ」（和泉書院影印叢刊1『異本源氏こかゞみ』昭和五三年）
古活字版・『マイクロフィルム版大東急記念文庫所蔵　古写古版物語文学総瞰　古物語　源氏物語』（雄松堂フィルム出版）所収（上巻末「慶長十五年十二月日書之」とあり）

注21　伊井氏前掲書八五四頁

注22　◇御法

露けさはむかしもいまもおもほえす大かた秋のよこそつらけれ
「むかしもいまも」　（古）（改）（異）「大」むかしいまとも
◎（古活）つゆけさはも昔も今もおもほえす大かた秋の夜こそつらけれ

◎「提」（二三七頁）

露けさはむかしも（ママ）今もおもほえす大かた秋の夜こそつらけれ

（※「ママ」は編者によるものをそのまま残した。注10参照。）

『大成』御法一三九六⑩（大島本）

露けさはむかしいまともおもほえす大方秋の夜こそつらけれ

この「露けさは」歌の「むかしもいまも」の部分は、『源氏物語提要』と共通する。しかしながら、九大本にはこの例の他には『源氏物語提要』と一致する歌異文はない。そして、この「むかしもいまも」が古活字版とも一致する本文であることを考えれば、これのみ『源氏物語提要』との関わりを考えるよりも、後の「あふ事の」「をくとみし」の二首同様、古活字版との関わりによると考える方が妥当かと思われる。

注23 「（る三）」「（あやなさ三）」の「三」は『三帖源氏』

注24 「ママ」は編者によるものをそのまま残した。注10参照。

注25 九大本の異文注記は三種あり、これは、歌・梗概本文の区別なく施される。

①異文に続き「イ」と付記されるもの

②異文に続き「本」と付記されるもの

③異文のみが記されるもの

三種の注記の異なりは、それぞれに校合した本が違うことを示すかとも思われた。しかし、今回調査に用いた小鏡の三系統のそれぞれの伝本から見て、例えば三種の注記が三系統に対応するというような結果は得られなかった。従って、この注記の問題について、各々がどのような本を意味するのかに関してはそれを明らかにするには至っておらず、猶再考を要すと思われる。

注26 同書・第二部「國文學に於ける文献批判の方法論」第十三章「文献批判に於ける「混態」の意義」

注27 寺本直彦『古筆と源氏物語』「源氏物語受容の一様相ー源氏小鏡一本をめぐってー」（『古筆学叢林』三巻）（八木書店　平成三年）

注28 剥跡もないので，最初から布張のみだったと思われる。

注29 但し、これに引き続いて小鏡の目次が付されるので、全体を指す名称とは考えにくい。

注30 「帋魚庵」については、現在確信を持って挙げられる人物は探し得ていない。しかし、号に「帋魚（紙魚）」という語を用いるのは近代以降の流行であるところから、この蔵書印については近代のものであろうという御教示を中野三敏先生から頂いた。また、九大本の装訂についても合わせて御教示頂いた。

（かわはらだ　ゆうこ・九州大学大学院博士後期課程）